辰春

宵壽

英雲利

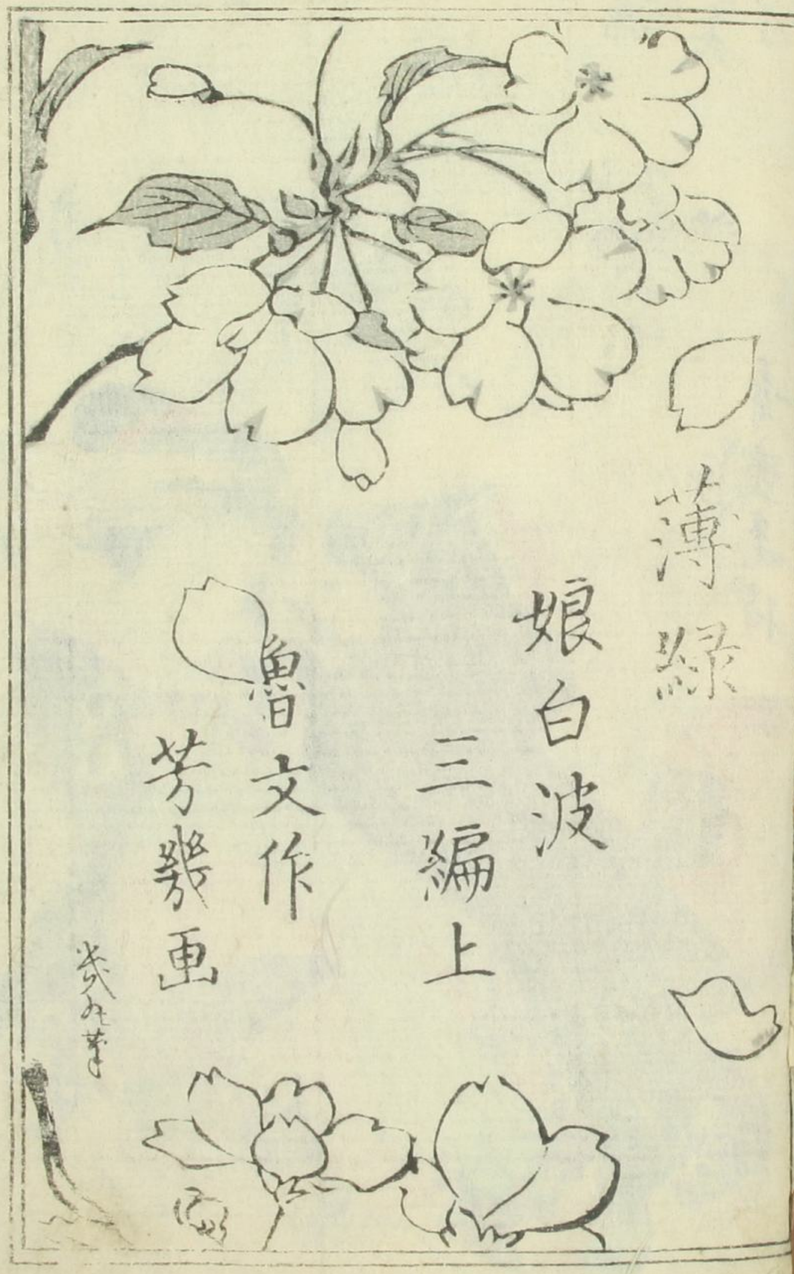
娘志ゝ浪

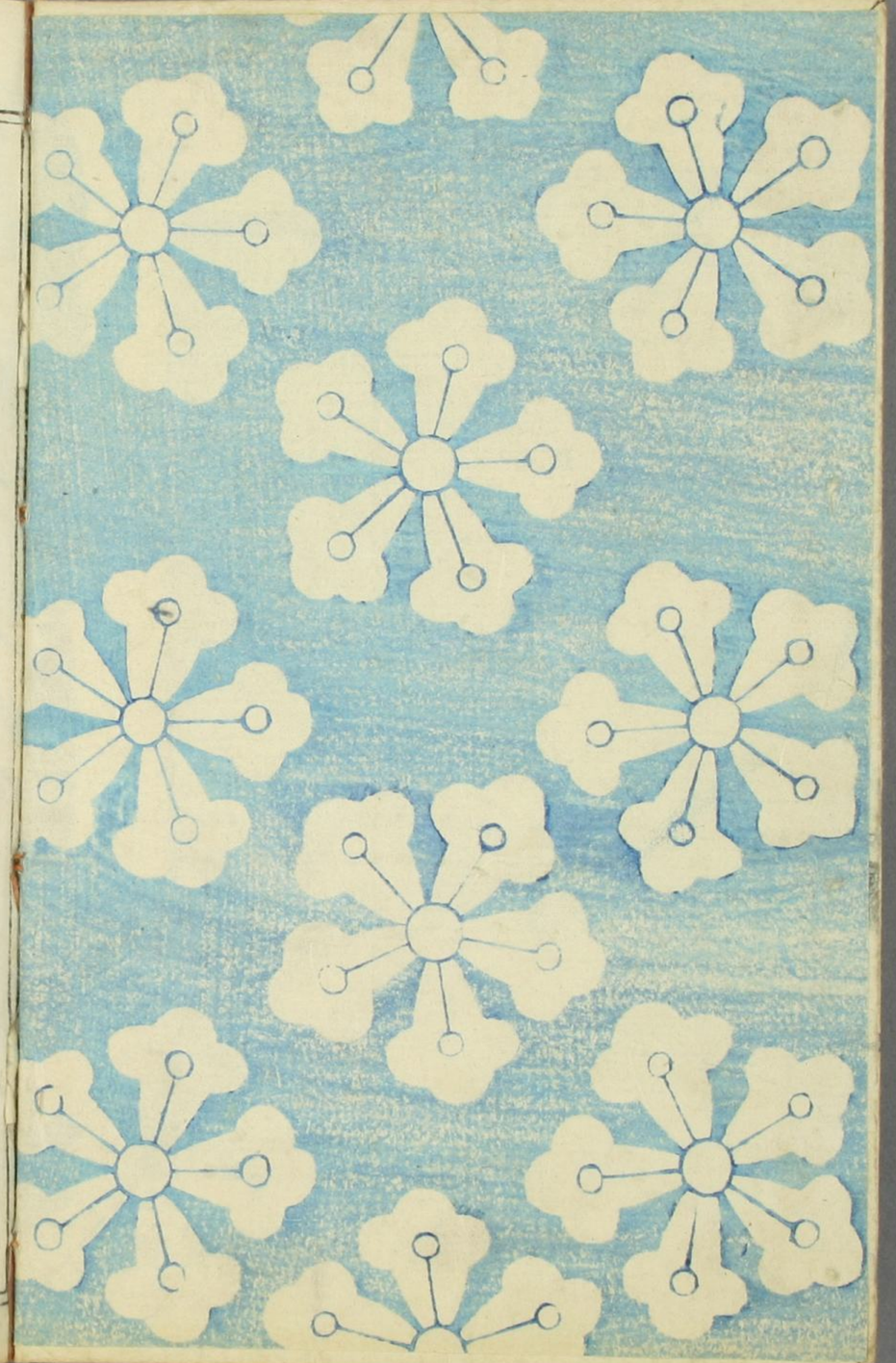
第三編

偽名酒乃文作

朝霧樓芳歳玉

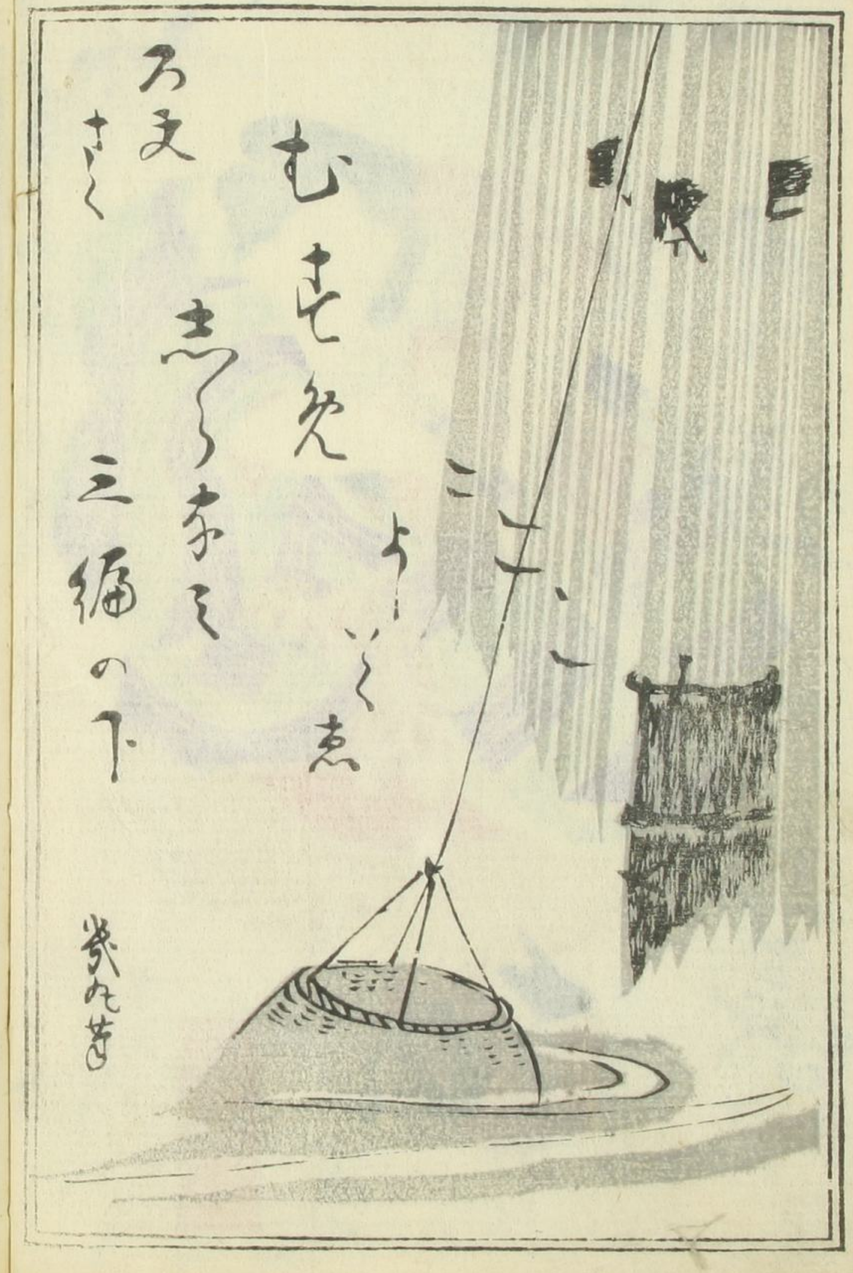
青藍堂

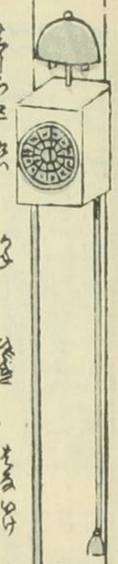

薄緑
娘白波
三編上
魯文作
芳幾画



俤名垣曽我作
恋病芸者重
俤辰巳
三編下

薄
娘
青盛半梓
三編上

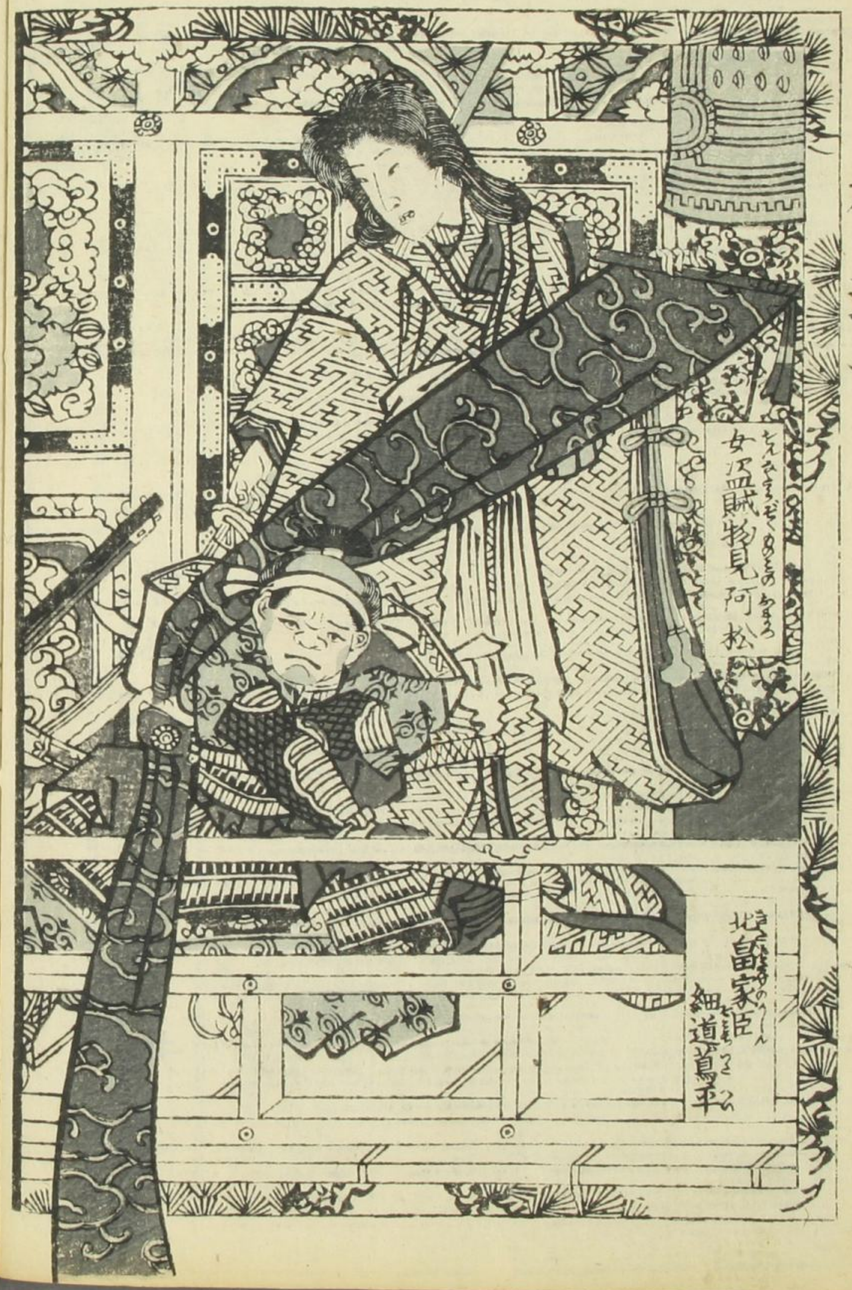




柱時計の鐘が響ふ。花瓶の櫻散て後丸行燈の月天井にさし昇る。閑室の春宵。彼天地を壺中ふ収め〜。仙聖の術ふ此やうんと行ひたまふ書齋乃幽栖。見ぬ世の人を友達ふ讀書を御仁と入來る。難波の旅客石叟ぬ〜まり。余編ふ〜〜稗史を閲〜〜。机の角を敲いて云。足下適万物の。靈と生まれ只寧。無計業ふ碌〜と。三十六歳空く過ふ。前世何等の因縁ぞや。余莞示と答て曰我ハ元來紙虫の後身。石叟惘て立去ぬ。以序〜す

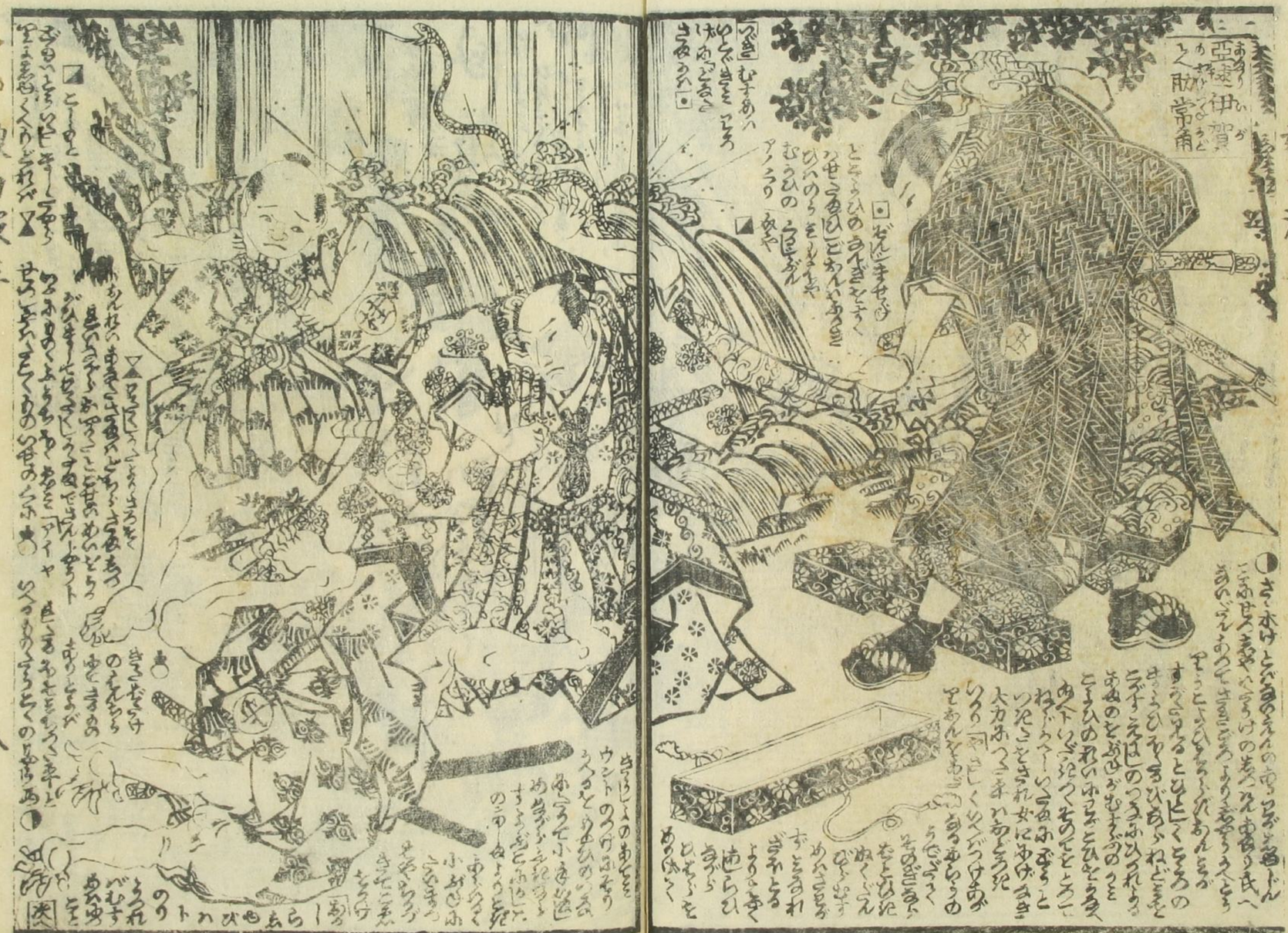
慶應四辰春　假名垣魯文漫誌

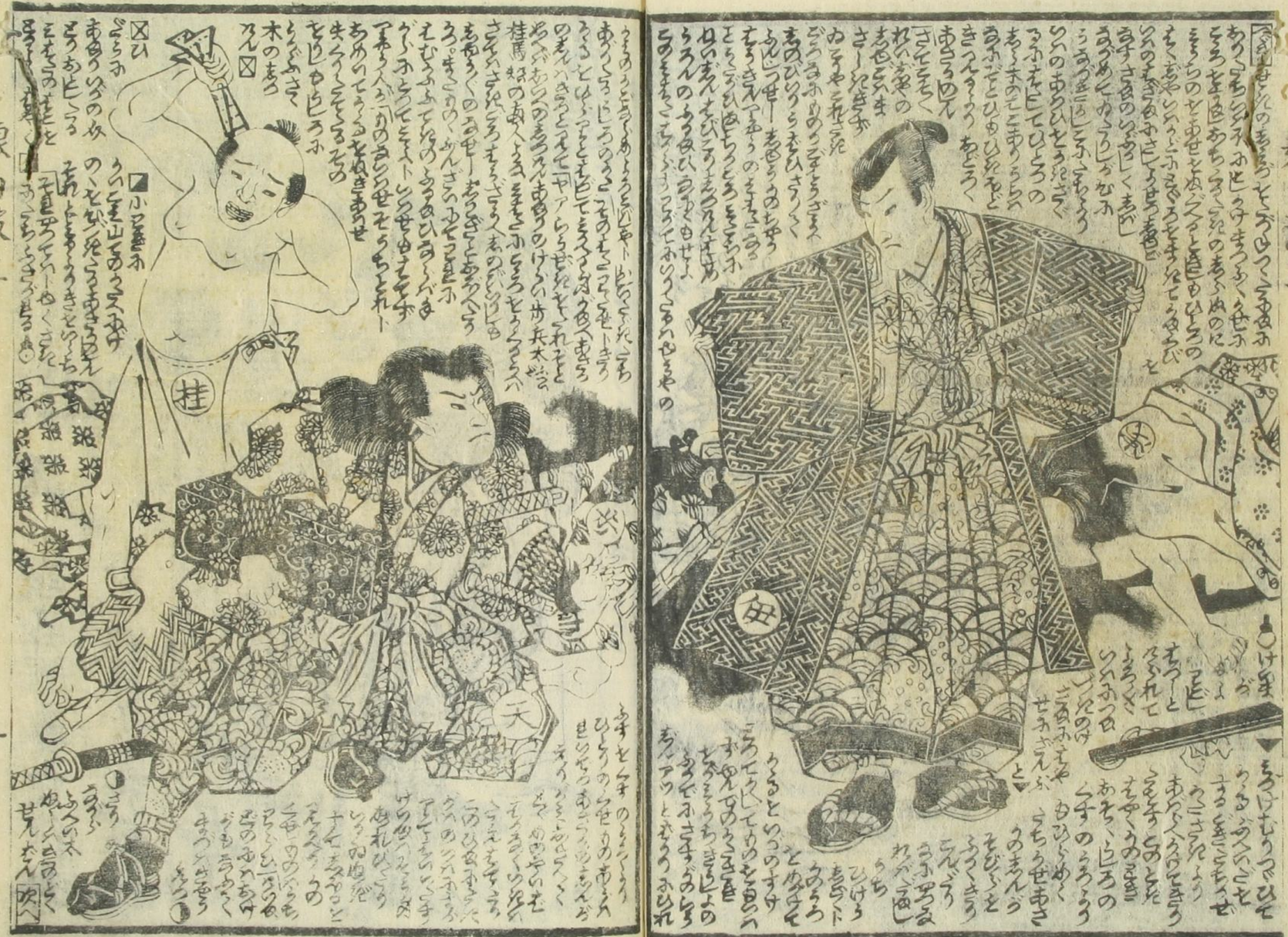
吉慢斧 杉本大膳


女江賊物見阿松
北畠家臣
細道蔦平

牛若源治
錦竜の旗
勝見仙太郎

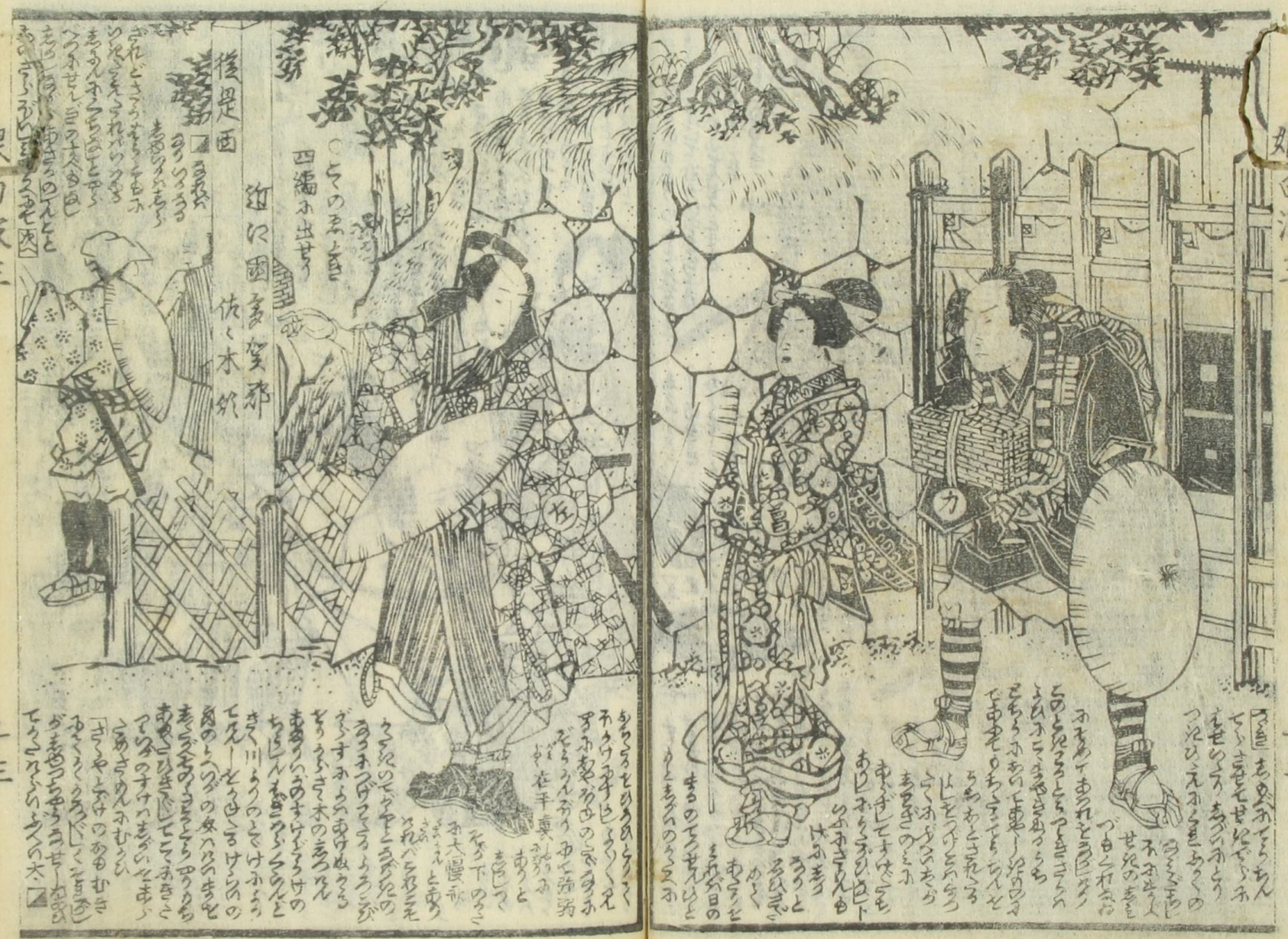
娘白波三編
次へ





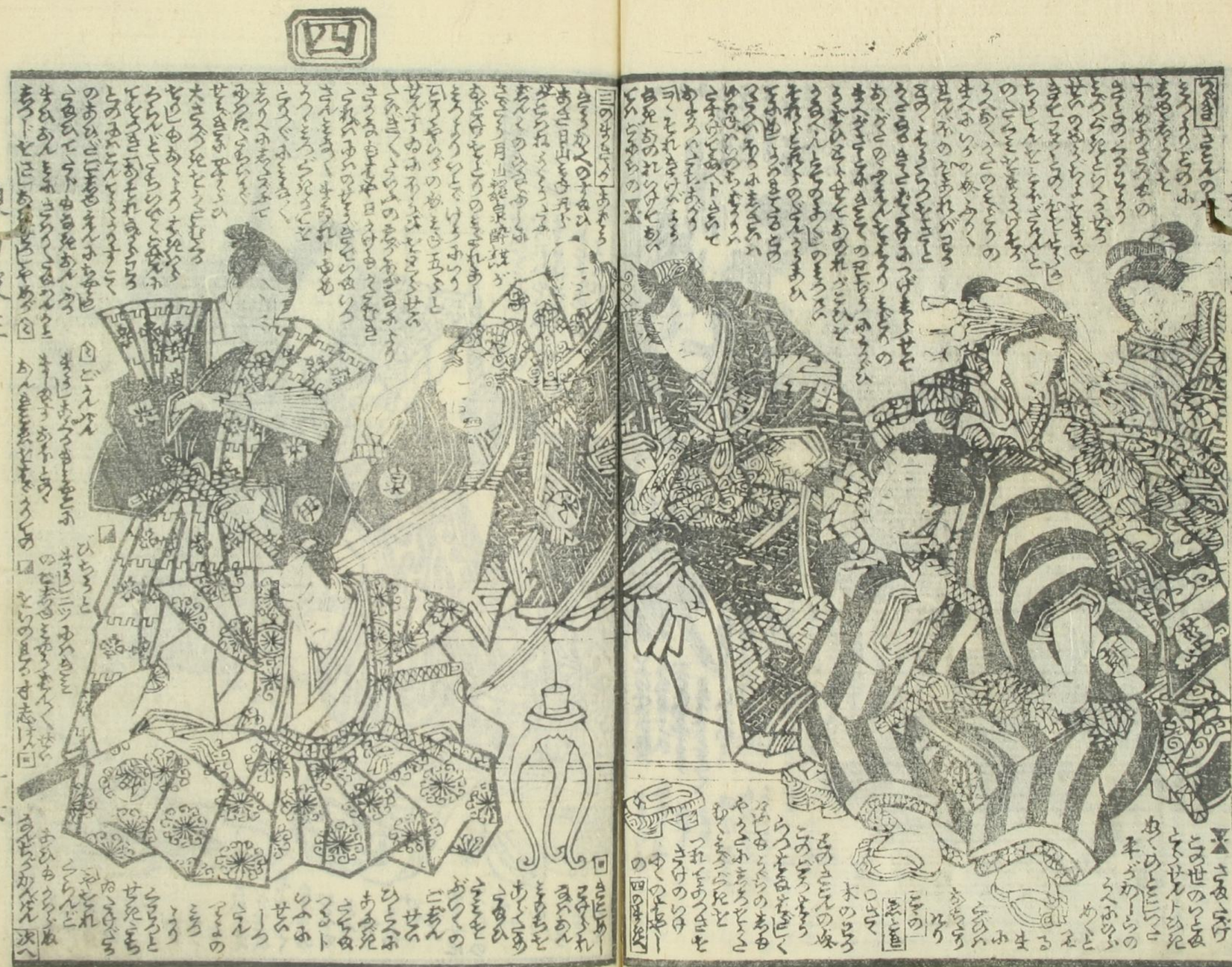
假名垣魯文作
恵齋芳幾画
見より下り関寺まち

三

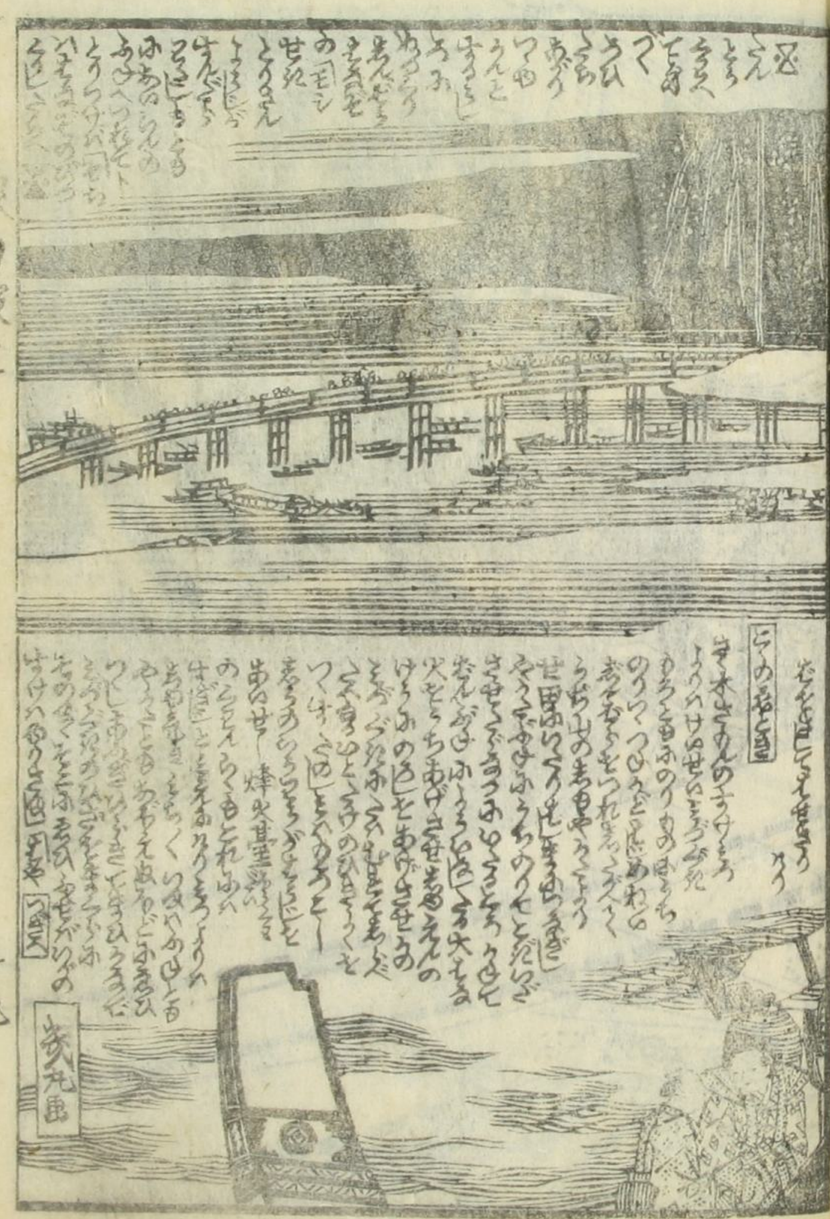


鍵の手阿竹
板の間阿梅

松
竹



丸海



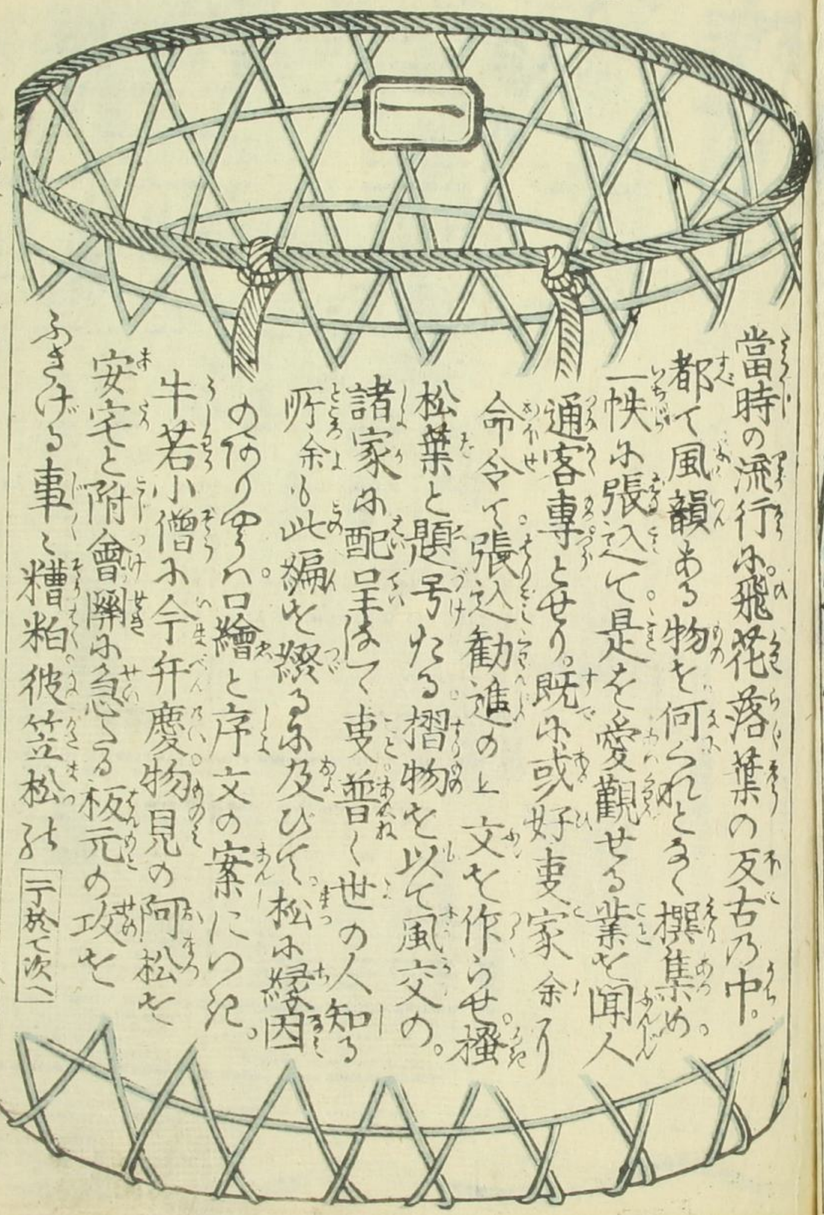
辰ノ春
開梓
書文作芳幾画
青盛堂
備交
書來

四編下
四編上

清みのもの むすび人

四編下

呂文作
芳盛画



當時の流行ふ。飛花落葉の反古乃中。都て風韻ある物を何らかとく攫集め。一快ふ張入て。是を愛觀せる業を聞人通客專とせり。既ふ或好事家余り命令て張込勸進の上文を作らせ。松葉と題号なる摺物を以て風交の。諸家ふ配呈ばて吏普く世の人知る所余り此編を綴るふ及ひて。松ふ緣因のの口繪と序文の案につ紀。牛若小僧ふ今弁慶物見の阿松を安宅と附會ふ急なる板元の攻をふきげる事し糟粕彼笠松ふ

〔下於て次へ〕

張込勸進帳
物見阿松

今弁慶仁平治
娘白妙
牛若小僧源次

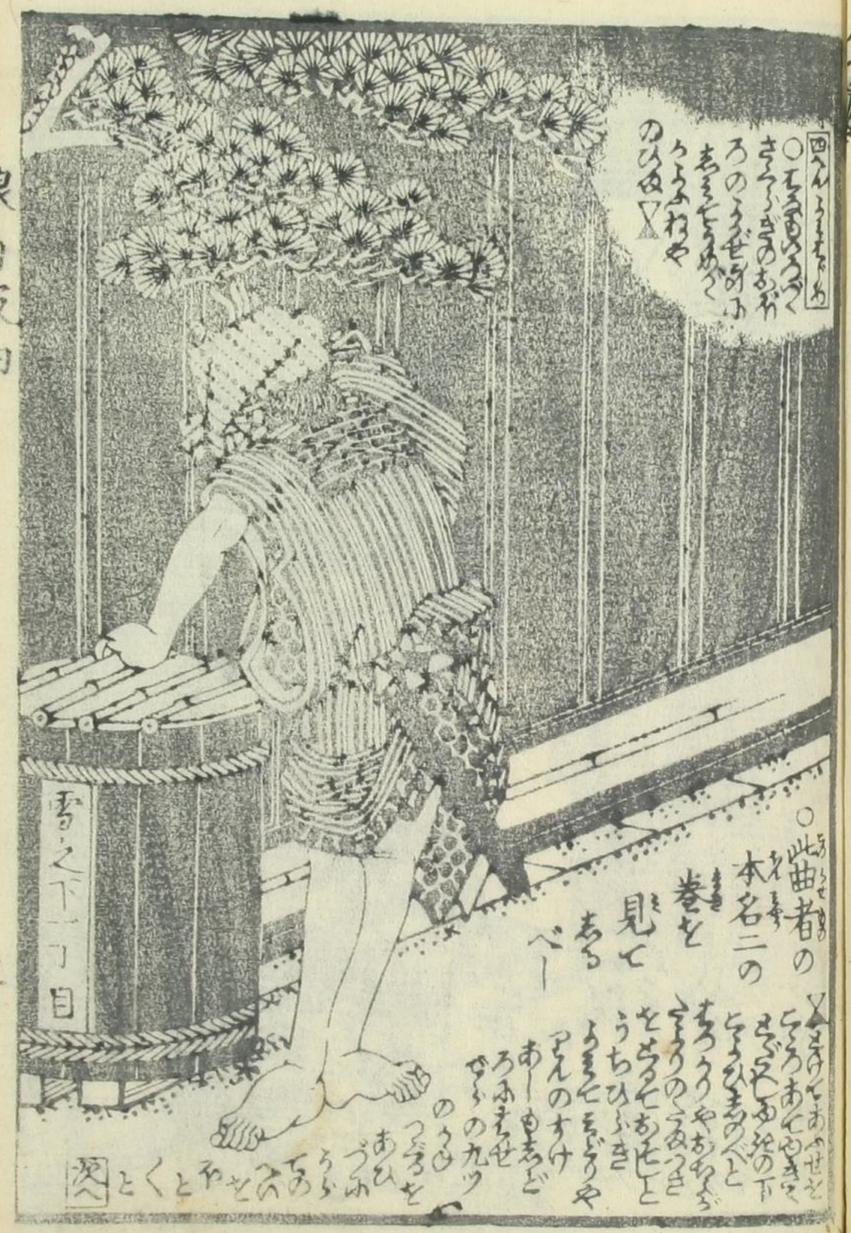
安宅松の春くし

出店

存文の つさ 落葉を拾ひ。筆の熊手ふ彼処此処とうろ
集める拙作ゆ。板元際張込て。彫摺製
冊の美をほこく。馬士にとし美服反古りゆ
表紙。當時流行の合巻と等しく批評をぬりて
飛花落葉の部数を狙さ。峯入のころ宝の山入。
大恩奥主の御贔負諸君子。秋の月ゆ倦ぐ。
長時長夜の長物語を。観進看文大團圓ぐ。
尊覧の程を希ふと。ホホ敬白ス

慶應四戊辰弥生

假名垣魯文記



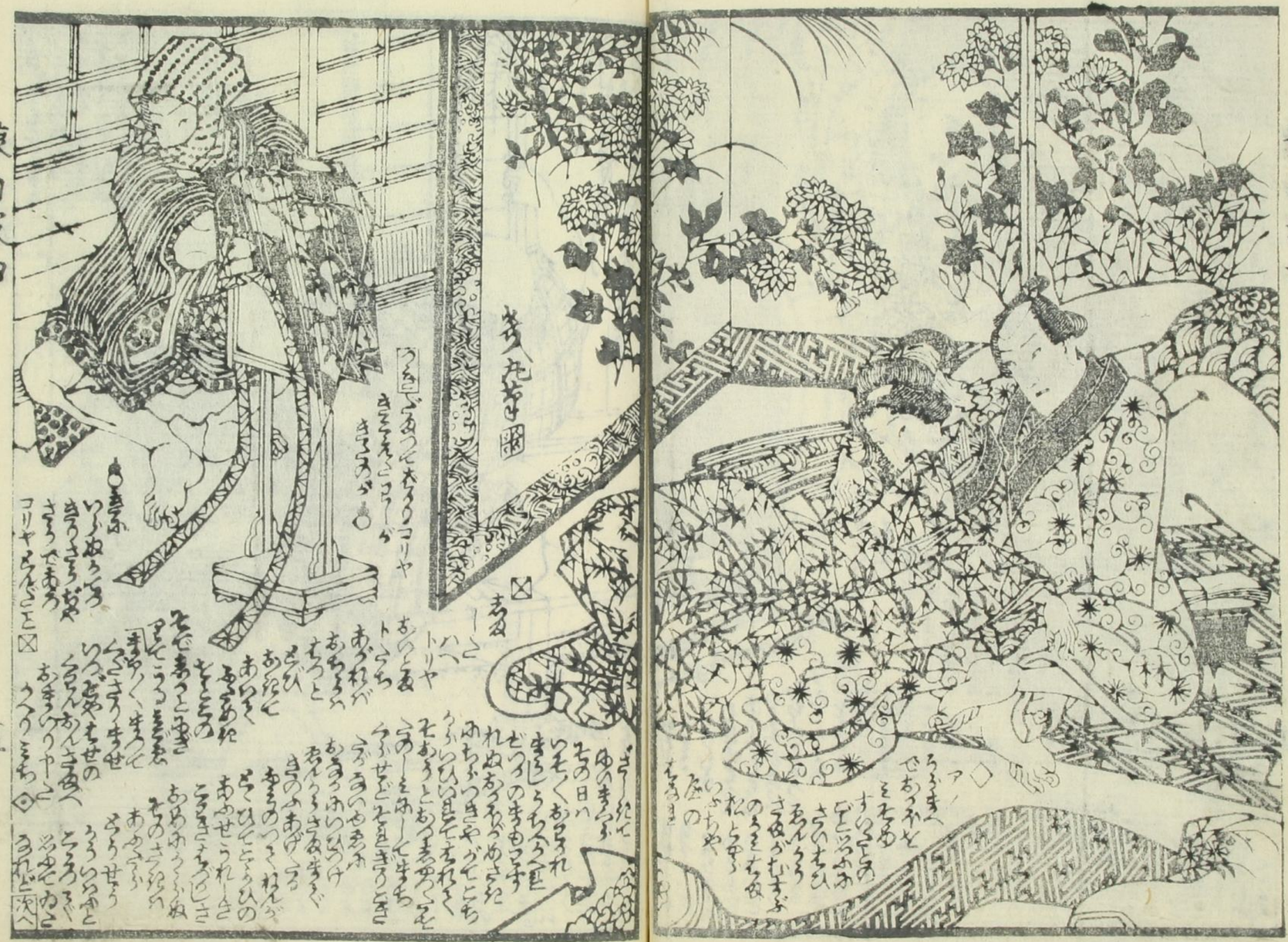
安宅松の春し

出店

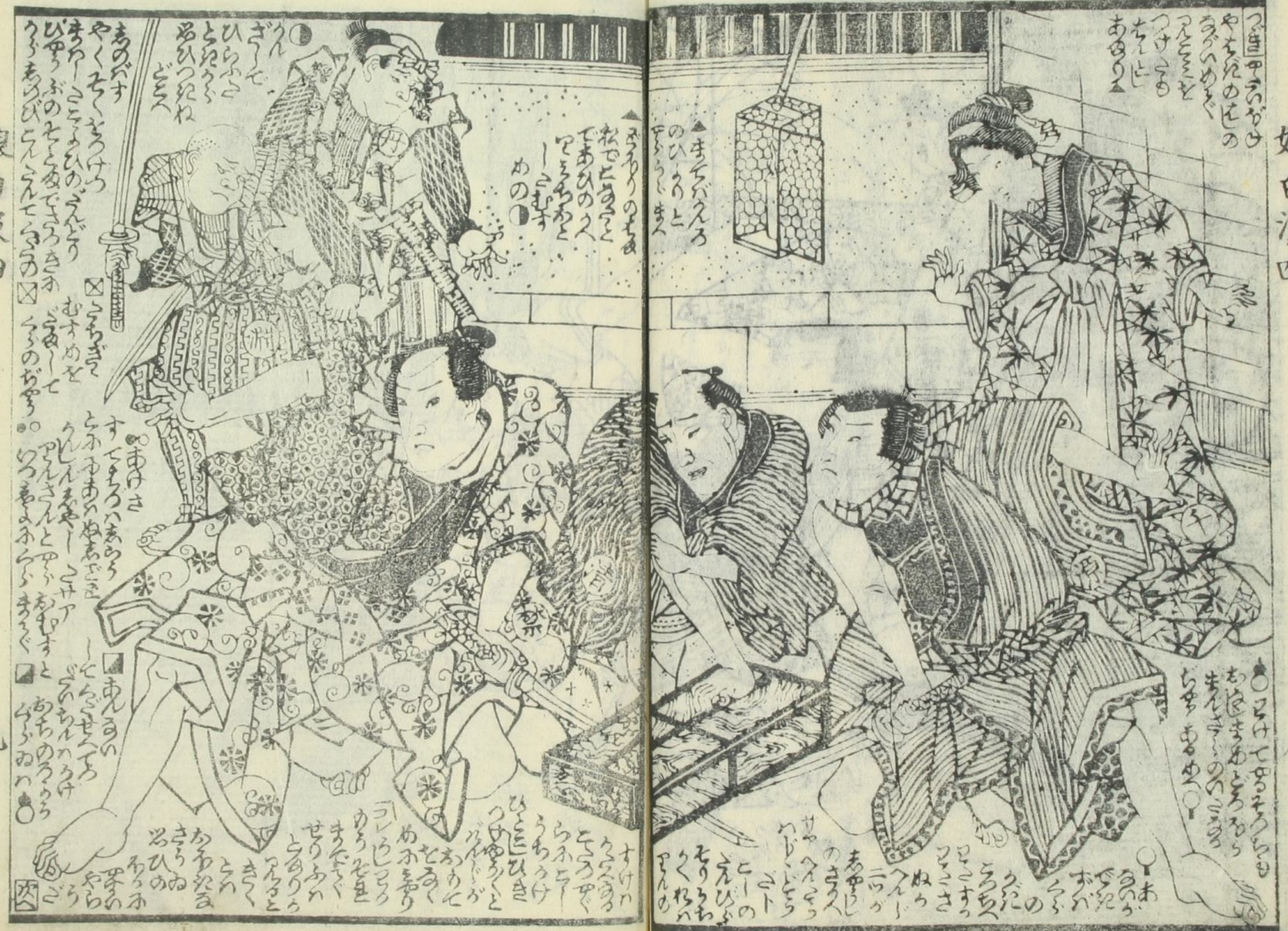
序文の落葉を拾ひ筆の熊手ゐ彼処此処とうた集める拙作ゆ板元際張込て彫摺製冊の美をほこく然ども馬士にとし美服反古ゆ表装當時流行の合巻と等しく批評をぬりて飛花落葉の部数を墨さぶ峯入のころ宝の山入。大恩典王の御贔負諸君子。秋の月は倦ぬで。長時長夜の長物語と。観進看文大團圓まぐ。尊覧の程を希ふと。ホホ敬白ス

慶應四戌辰弥生

假名垣魯文記



源
丹
十

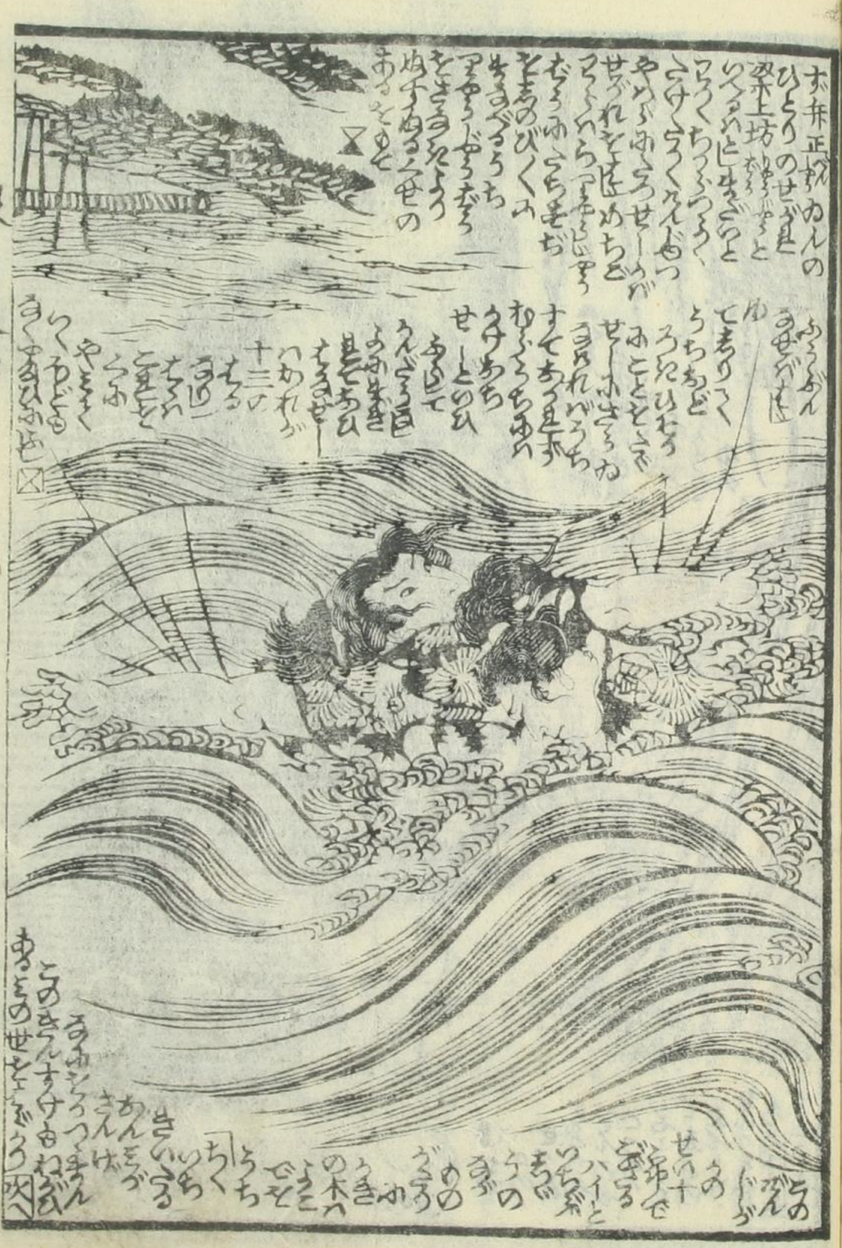


天狗杉

つゞき

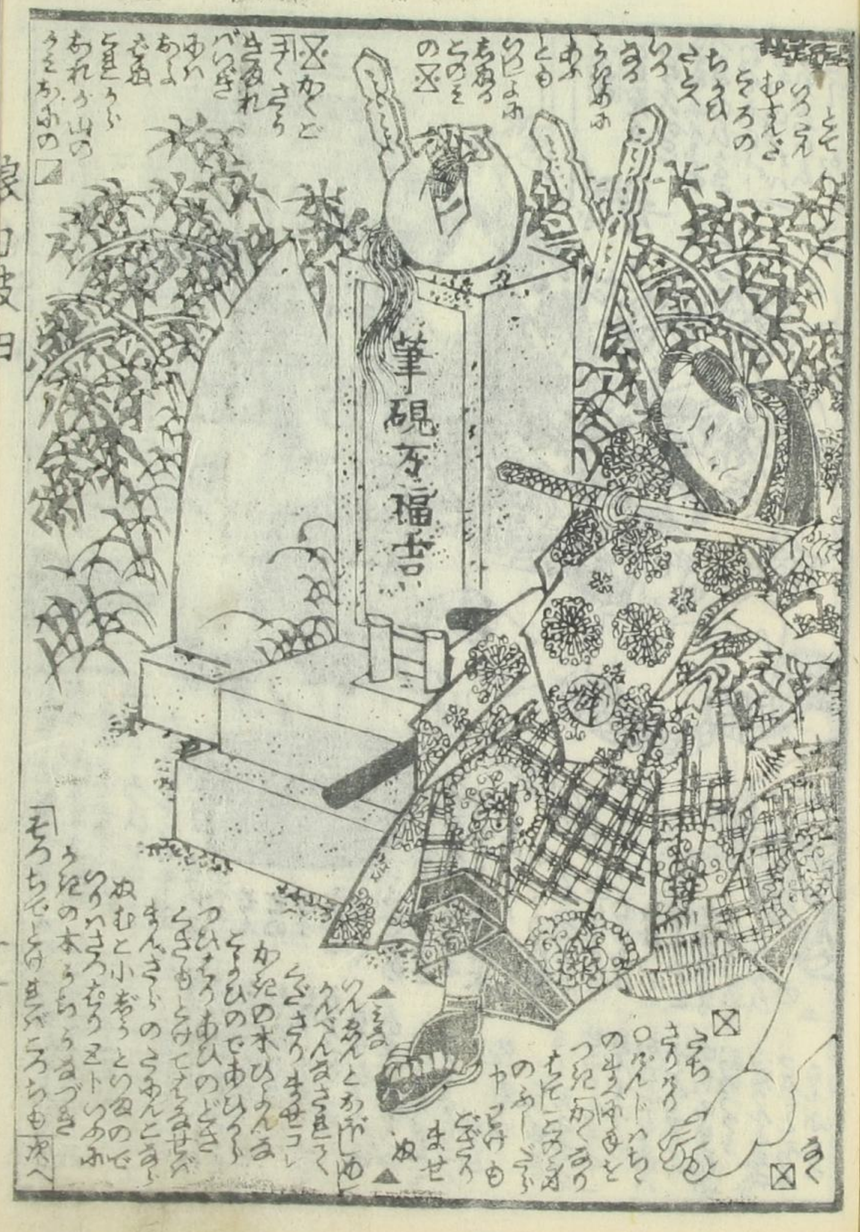
此処と次の半丁の繪ハ源治ガ稚立はして清兵衛ガ物語の赴と

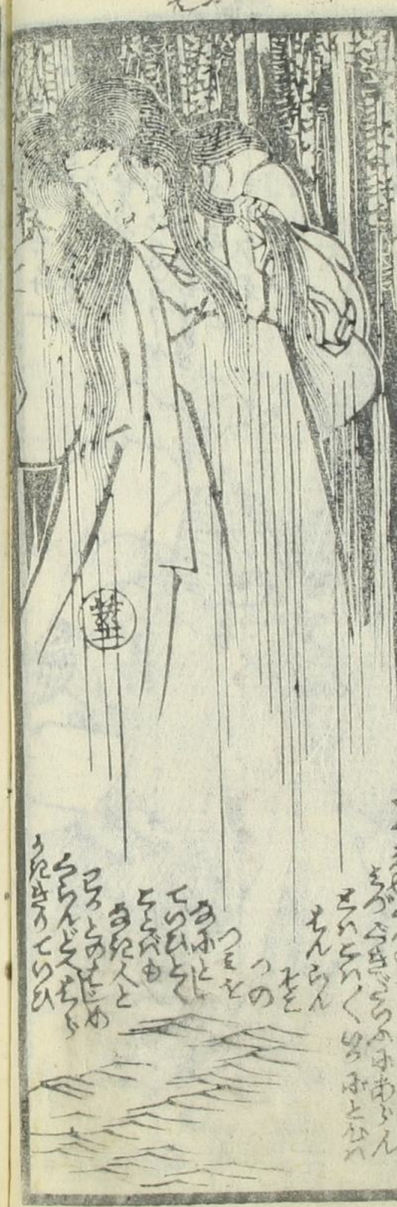
假名垣魯文作
一恵齋芳幾画



四
三の巻
朝
夕

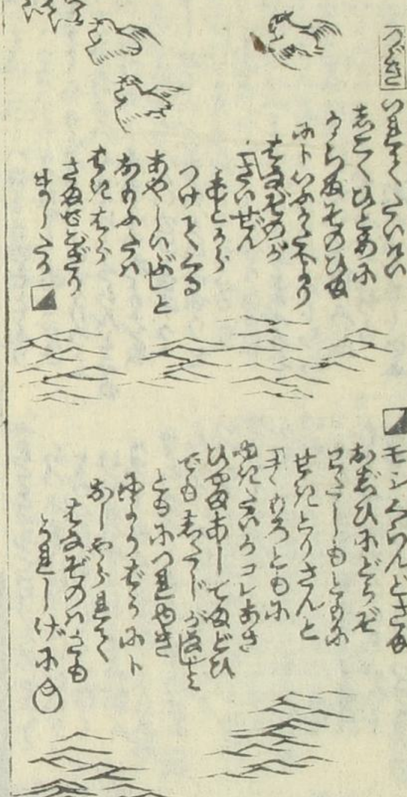
大乘

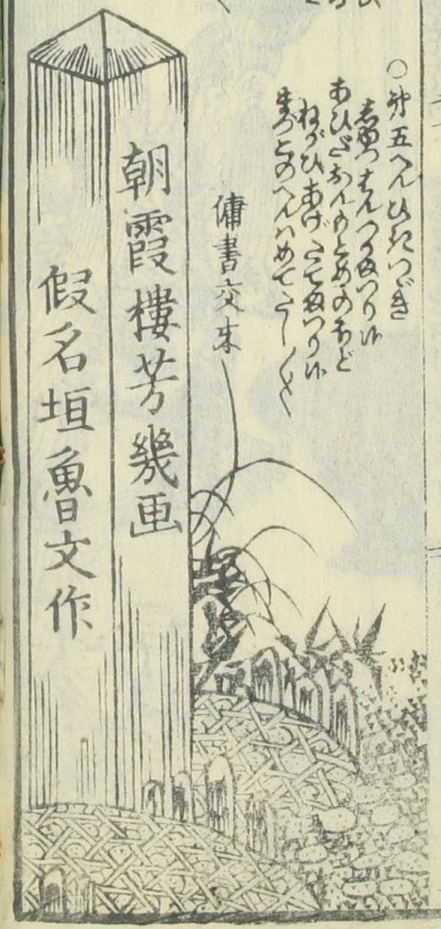

筆硯文福吉



前と
後の巻を
見て知るべし
麦の繪解
○朝日山後ゐ
油カ谷五郎と
改めす

朝
花





朝霞樓芳幾画

假名垣魯文作

010190518189

薄緑娘白波

第四編

假名垣魯文作
一惠齋芳幾画

青盛堂板